

從日本文學看乃木希典的殉死

徐 翔 生

國立政治大學日文系講師

(收稿日期：2001年10月14日；修訂日期：2001年12月9日；接受刊登日期：2001年12月17日)

摘 要

一九一二年九月十三日明治天皇出殯之日，日俄戰爭中的儒將乃木希典，偕夫人以武士道的切腹為明治天皇殉死。乃木希典為何非要殉死？日本國內對其殉死又如何評價？本文將焦點鎖定明治時代代表性作家森鷗外的歷史小說「興津彌五右衛門的遺書」與夏目漱石的名著「心」加以探討，並向下追究至大正時代的文學家志賀直哉、武者小路實篤以及芥川龍之介的作品，說明當時文學青年對於乃木殉死的看法。另從現代文學家司馬遼太郎的小說「殉死」以及加藤周一的名作「日本人的生死觀」中，一窺現代文學者眼中殉死的目的與意義。冀藉一系列作品，解析日本社會對於殉死之觀點，試圖建構日本人死生觀之時代變化及詮釋現代人死生觀之真貌。盼經由此一探索，補強作者對日本人死生觀之系列研究。

關鍵詞：乃木希典・「興津彌五右衛門的遺書」・「心」・「殉死」・「日本人的死生觀」

Nogi Maresuke's concept of Junshi from the Perspective of Japanese Literature

Hsu Hsiang Sheng

Received : Oct. 14 2001 ; Accepted : Dec. 17 2001

Abstract

On September 13, 1912, the day of Emperor Meiji's funeral, Nogi Maresuke—the Confucian general in Japan-Russia War—committed suicide with his wife to honor his emperor by means of the bushido's seppuku. Why did Nogi have to die for the emperor? How does the Japanese public think about it? This paper focuses on the discussion of two novels—*The Will of Okitsugoemon*, a historical novel by the representative novelist of the Meiji period Mori Ogai, and *Kokoro* by Natsume Souseki. To explain the young literati's view on Nogi's junshi, I will further discuss the works by Siga Naoya, Mushanokoji Saneatsu, and Akudagawa Ryunosuke of the Taisho period. Furthermore, I will include Shiba Ryutarou's novel *Junshii* and Kato Shuichi's *The Japanese Philosophy of Life and Death* to illustrate modern literati's perspective on the goals and meanings of junshi. By the discussion of these works, I wish to analyze the Japanese perspective on junshi, to construct the changes of the concept of junshi through the years, and to explicate the reality of modern concept of junshi. Through this exploration, I expect to strengthen the series study on Japanese philosophy of life and death.

Keywords : 1.Nogi Maresuke; 2.*The Will of Okitsugoemon*; 3.*Kokoro*; 4.*Junshi*;
5.*The Japanese Philosophy of Life and Death*

日本文学に見られる乃木希典の殉死

一九一二年七月三十日、明治天皇が死去し、日本の年号は大正に変わった。この大正元年の九月十三日、明治天皇の大葬に際して、日露戦争で名を馳せた陸軍大将乃木希典は、静子夫人とともに武士道における伝統的な死に方である切腹により、明治天皇のあとを追って殉死した。日本は江戸時代の寛永三（一六六三）年より、幕府の命令によって殉死が禁止されて以来、すでに二百五十年もが経っていた。この間、特に時が近代に入った明治以降、殉死ということはほとんど見受けられず まるで過去の歴史に消えてしまったかのように思われる。そのため乃木希典の殉死に対して、時勢の進歩を理解しえない時代錯誤の行動であると考えた人もいる。他方、乃木の死に感動し、それを明治天皇への至忠を貫いた崇高の行為とみなしていた人もおおぜいいる。いったい乃木は何のために殉死したのであろうか。本論は乃木希典の殉死をめぐり、その死における意義を吟味しながら、日本人の死生観を論じたいと思う。

ここで付言すべきなのは、大正時代から今日まで乃木希典に関する著作はかなり多く、その殉死についての研究も少なくないということである。この数十年の乃木殉死に関する作品をいくつかあげてみれば、たとえば松川芳男は『乃木希典』（吉川弘文館、一九六〇年）で、乃木がもっとも愛読した『中朝事実』からその殉死思想の形成を説明している。また小田村寅二郎は『日本思想の系譜』（国民文化研究会、一九六九年）において、乃木殉死の「遺言條」を取り上げながら、遺書からその殉死の動機を述べている。そして司馬遼太郎は『殉死』（文芸春秋社、一九七二年）において、日露戦争を背景に乃木殉死の理由を解釈している。さらに大濱徹也の『乃木希典』（河出書房、一九八八年）では、当時の時代背景を考慮しながら、乃木殉死の意義が解説されている。

以上は日本国内における一九六〇年から現在までの乃木殉死に関する代表的な書

物とも言えよう。一方、外国人から見た乃木殉死に関する著書や論述なども見られる。たとえばウオツシュバーン著・上田修一郎訳の『乃木希典』（甲陽書店、一九七四年）では、乃木の一生を述べながら、明治天皇に忠を尽くすために殉死することが書かれている。スタンレー・ウオシュバン著・目黒真澄訳の『乃木大将と日本人』（講談社・一九八〇年）において、乃木は日本の古武士、愛国者として描かれ、彼が殉死によって日本古来の理想主義を燃え立たせようとしたと書かれている。また加藤周一とM・ライシュ、R・J・リフトとの共著になる『日本人の死生観』（岩波書店、一九七七年）においては、乃木の死生観の形成を叙述しながら、その殉死の動機を解明している。そして台湾国内でも曾文媛が「乃木希典の研究—その自殺を中心に」（文化大学日本研究所、一九八七年）という題で、乃木の死が日本文壇に与えた影響、及び知識人のその死に対する評価などについて書いている。

しかしこれまでの乃木殉死に関する研究は、歴史学または社会学から行われたものが多かったようであるが、日本文学上からのアプローチはあまり見られない。村松剛の『死の日本文学史』（新潮社、一九七五年）に、武士道の思想と関連して、乃木の殉死に少し触れてあるが、その殉死の思想を解釈してはいない。モーリス・パンゲの名著『自死の日本史』（筑摩書房、一九八六年）では、哲学的な観点から乃木の死を分析しているが、その殉死についての探索は行われていない。曾文媛は「乃木希典の研究—その自殺を中心に」で、乃木殉死に関する日本文学作品をいくつか引用しているが、作者が乃木の殉死をどのように扱っているか、ということについてはあまり論じられていないようである。それでは乃木の殉死はいったい日本社会にどんな衝撃を与え、その死は日本人の死生観にどんな影響を及ぼしたのか、私はその殉死に関する文学作品から論述してみたいと思う。

本論では、歴史的な立場からのアプローチはせず、社会学の理論に触れることもしない。明治時代から現代までの乃木殉死に関するもっとも代表的な文学作品及び論述を取り上げ、その中に描かれている殉死の意義を検討しながら、殉死に対する日本文学者的見解を考察したいと思う。日本文学者的見解を考察す

ることにより、殉死は日本人の死生観にどのような影響を与えてきたのか、また日本人の死生観はいかに変化してきているのか、を究明してみたいというのが本論のねらいである。本論考が近代から現代までの日本人の死生観の解明に少しでも役立つことができれば幸いに思う。ここでまず乃木の生まれた環境と育った環境から考察を始めよう。

(一)

幕末の嘉永二（一八四九）年十一月十一日、乃木希典は長州藩士乃木十郎希次の嫡男として、長州毛利家の支藩であった長府毛利家の江戸麻布の屋敷で生まれた。父の乃木十郎希次はもと毛利藩の藩医であったが、のちに藩主に認められ武士としてとり立てられた。毛利藩邸は元禄十五（一七〇二）年に、赤穂事件を起こした赤穂浪士のうち、武林唯七、間新六、岡島八十右衛門などの十人が討入りの後、五十日あまりの間預けられた場所であるし、切腹した場所でもある。ここに生まれ、ここで育った乃木は、幼少の頃より赤穂事件や赤穂浪士の最期のようなすを聞かされ、彼らが書き残した詩文などを読まされていた。こうした環境で成長した乃木は、ごく自然に武士の生活に憧れ、その独自の死生観を形成するようになったのである。¹

乃木は十歳の時、両親とともに江戸藩邸より国元の長府に帰り、藩の集童場で教育を受けた。そして十四歳の時、彼は叔父の玉本文之進の家で暮すようになり、長州藩の藩校明倫館に通った。松下村塾の創始者である玉本文之進は、乃木の叔父であると同時に、幕末の思想家吉田松陰の叔父でもあり、吉田松陰の育ての親でもあった。文之進は若い乃木を教育するにあたり、つねに吉田松陰を引き合いに出して教え、松陰の著作「士規七則」を与えて、乃木を激励しつつ育てた。おそらく文之進としては、乃木を若年で亡くなった吉田松陰に見立て、彼に厚い期待をかけたのであろう。この

¹ 乃木希典の生まれた環境については、『乃木希典日記』（乃木神社社務所編）及び『乃木希典全集上』（国書刊行会）を参照。

ように、乃木は玉木文之進によって教育を受けるとともに、吉田松陰の思想をも学んだ。これは乃木希典の人格形成にかなり大きな影響を与えていると考えられる。²

吉田松陰の思想をさらにさかのぼると、それは江戸時代の兵学者山鹿素行に帰着する。天保元（一八三〇）年に生まれた松陰は、安政元（一八五四）年ペリーが米艦を率いて来日の際、下田で密航を企てたために入獄し、安政六（一八五九）年三十歳の時、獄中で刑死していた。吉田松陰は本名杉矩方、五歳の時に子供のなかった吉田大助の家の養子となり、大助の弟である玉木文之進に訓育された。松陰は文之進の指導のもとで文之進の家学すなわち山鹿素行の兵学を習い、さらに素行の士道を基礎にして、海外密航事件が失敗した後、萩の野山獄中で「士規七則」という論述を執筆した。武士道教育の眼目を中心に書かれたこの論述はのちに松下村塾の教育書となり、乃木がつねに座右に置いたものである。以上のように、乃木希典はまず玉木文之進、そして吉田松陰を通して、山鹿素行の士道を勉強し、素行を崇拝するようになった。³それと同時に、素行の思想に加えて松陰の尊皇精神は、乃木の思想形成にとって決定的なものとなった。⁴

幕末の頃、長州藩が支藩を含めて幕府と対決することとなった。当時、乃木は十八歳ながら長州藩の新軍に加わり、幕府の長州征伐や戊辰戦争に向かった。そして明治

² 乃木は自著「吉田松陰先生の薫化」について、吉田松陰から大きな影響を受けたことを次のように述べている。すなわち乃木は幼少の時から父より吉田松陰の著書『武教全書』を始め、各種の講録の謄写を命じられたことで、はじめて吉田松陰を知り、松陰を尊敬すべき偉大な人物だと感じた。続いて松下村塾において、玉木文之進より松陰を模範として訓戒され、その著作「士規七則」などを勉強した後、吉田松陰をよりいっそう深く尊崇するようになり、一死なお松陰の忠君愛国の精神を天下に伝えようと決心した。以上、「吉田松陰先生の薫化」（『乃木希典全集下』所収）を参照。

³ 自著「山鹿素行先生を尊崇するに至りたる動機」において、山鹿素行を崇拝する理由が次のように述べられている。すなわち乃木は、年少の時より素行の『山鹿語類』、『中朝事実』などを始めとしてその著作に触れていた。さらに玉木文之進について山鹿素行の兵学を習い、素行の事績や教義などを研究することを通して、ますます山鹿素行に対して深く尊崇の念の抱いていった。以上、「山鹿素行先生を尊崇するに至りたる動機」（『乃木希典全集下』所収）を参照。

⁴ ここでひとこと説明を補足しなければならないのは、乃木は武士道の伝統的な死に方である切腹により、明治天皇のあとを追って殉死をとげたが、上述したように、彼は幼少の時より吉田松陰、山鹿素行から大きな影響を受けたために、その思想形成においては、日本伝統的な武士道よりも山鹿素行の士道による影響がずっと大きい、ということである。

維新の後、乃木は新政府の陸軍に入り、明治八（一八七五）年に小倉の歩兵連隊長として萩の乱、そして二年後の西南戦争の役に参加した。戦後、乃木はさらに連隊長、旅団長などの職務を経て、ドイツへ兵制の研究のために留学に行った。一年半のドイツ留学から帰国後、乃木は少将の時休職となり、那須野でしばらくの農耕生活を送ることになった。

ドイツ留学の中で、乃木の心にもっとも深く感じられたことは、西欧列強の徳義の根本が宗教であるという点だったようである。この宗教は単に宗教上の信仰のみにとどまらず、欧州の軍人の精神的な支えともなっている。それに対して、日本の宗教は仏教思想が中心となっており、何の役にも立たないものと映じた。そこで乃木は、軍人の徳義の根源を天皇と軍人勅諭、及び武士の伝統的な忠誠心にもとめるほかないと考え、その独特な思想を形成したのであった。その頃より、乃木は玉木文之進から教わった山鹿素行の『中朝事実』を繰り返し読みに読んで、この本の教徒のようになった。それと同時に、『中朝事実』は「士規七則」に次いで、乃木がもっとも愛読した本となった。

明治二十七（一八九四）年の日清戦争で、乃木はふたたび現役に復し、戦場で活躍した。そして戦後、彼は第三代台湾総督となり、台湾が日本領有となった直後の統治に当たった。台湾での総督の職を一年三か月担当した後、乃木は明治三十七（一九〇四）年の日露戦争でふたたび現役に戻り、中国満州の旅順要塞攻撃の最前線を任されることとなった。五か月にも及ぶ激戦の末、数万人の兵士が犠牲者となり、その中には乃木の二人の息子勝典、保典も含まれていた。この戦争が終わった後、乃木は軍事参議官となり、さらに明治天皇の命令を受けて、皇族、華族の子弟の教育にあたる学習院の院長となった。

明治四十五（一九一二）年九月十一日、すなわち殉死の前々日に、乃木は明治天皇の殯宮を拝した後、学習院院長として当時生徒であった裕仁親王すなわち昭和天皇に『中朝事実』を献上し、これを今生の名残として最後に講義しはじめた。そして明治天皇の大葬の日、乃木夫婦は明治天皇のあとを追って殉死を遂げ、日本国内をはじめ

め、世界中の人々を驚かせた。この時、乃木は六十四歳、静子夫人は五十四歳であった。⁵

(二)

以上、乃木希典の一生を概略的に述べながら、その思想並びに死生観の形成を考察してきた。それでは乃木の殉死はいったい何を意味しているのであろうか。また日本人はその死をどのように考えているのであろうか。以下、乃木希典の殉死に関する文学作品及び論述をめぐって、その殉死の意義を論じたいと思う。まず乃木の殉死にもっとも衝撃を受けた明治時代の文学者森鷗外から述べてみよう。

森鷗外は陸軍軍医としてドイツへ留学に行った時、すでに乃木希典と交流があった。また乃木が学習院院長となった時、白樺派の若い世代に嫌われて悩んだ彼はしばしば鷗外のもとを訪ね、その対策を求めた。この二人の交際は乃木の日記及び鷗外の『戴冠詩人』と「独逸日記」が明らかにしている。乃木が殉死したことを聞いた鷗外は大変なショックを受け、半信半疑の気持で、徹夜して五日足らずのうちに『興津弥五右衛門の遺書』という作品を書き上げた。⁶ではこの作品はいったい何を語っているであろうか。

『興津弥五右衛門の遺書』は細川忠興に仕えた武士興津弥五右衛門の一生を描いた物語である。弥五右衛門は若い頃、主君忠興の命で香木を買い求めに長崎へ行った。

⁵ 乃木は一八四九年十一月十一日に生まれ、一九一二年九月十三日に亡くなったから、死んだ時の年は六十四歳ではなく、六十二歳であった。しかし当時は数え年で計算されたので、本文では当時の慣習にしたがって六十四歳とした。

⁶ 大正元年九月十三日の御大葬の夜、帰途乃木殉死のことを耳にした鷗外は、半信半疑のこととして日記に次のように記した。「十三日（金）、晴。轎車に扈随して宮城より青山に至る。午後八時宮城を発し、十一時青山に至る。翌日午前二時青山を出でて帰る。途上乃木希典夫妻の死を説くものあり。予半信半疑す」。そして五日後の乃木夫妻葬式の日、鷗外が『興津弥五右衛門の遺書』を「中央公論」に寄稿したことは、「十八日（水）、半晴。午後乃木大将希典の葬を送りて青山斎場に至る。興津弥五右衛門を舁して中央公論に寄す」とある。鷗外日記からの引用は『鷗外全集第二十三巻』による。

その時、同道した相役に「香木は無用の翫物に有之、過分の大金を擲候事は不可然」と、不相応な値段で高価な本木を買うことを反対された。弥五右衛門は「主命たる以上は、人倫の道に悖り候事は格別、其事柄に立入り候批判がましき儀は無用なりと申候」という理論をもって応え、相役と口論しはじめた。口論の末、彼はついに刀を取り、相役を討ち果たした。

弥五右衛門は本木を持ち、熊本主君のもとへ帰った。同道した相役を討ち果たしたため、当然処罰を受けざるをえないと思って、彼はすでに切腹の覚悟ができていた。ところが、忠興は「総て功利の念を以て物を視候はば、世の中に尊き物は無くなるべし」と言っており、弥五右衛門の行為を褒め讃え、相役を討った責任を問おうとはしなかった。そのために、弥五右衛門はその後さらに忠誠を尽し、献身的に主君に仕えた。そして忠興が没後の十三回忌に、弥五右衛門はつい主君のあとを追って殉死したのである。⁷

以上は乃木希典の殉死に触発されて、森鷗外がはじめて書いた歴史小説である。この作品において、鷗外は歴史の中からかつて死んでいった人間の姿を浮かび上がらせ、彼らの世間の物事及び殉死に対する見方を取り上げた。小説の時代背景は当時とは異なっていたが、上述した内容から分かるように、鷗外は武士道の精神及び武士の殉死にきわめて肯定的な立場にある。特に、殉死という行為による武士の主君に対する忠誠及び献身的精神がすでに失われてしまった明治時代において、彼はこのような精神が乃木の殉死によってふたたび復活したことをその行為から感じ取った。したがって鷗外は乃木の殉死をもはや当世には起こりえない出来事として受け止めており、乃木殉死への共感を訴えている。それ以来、鷗外が創作において別の方向へ向かい、現代小説から手を引いて、歴史小説に専念するようになった。鷗外の作品が一転した

⁷ 森鷗外は大正元年『興津弥五右衛門の遺書』を書いたが、のちにこの初稿の冒頭及び末尾における切腹の場面を書き改め、同定稿となる。本論での引用は同定稿『興津弥五右衛門の遺書』（『鷗外全集第十一巻』所収、岩波書店）による。

そのきっかけは、乃木の殉死といっても過言ではないであろう。⁸

森鷗外と同じく、明治時代のもう一人の代表的な文学者夏目漱石も、乃木希典の殉死から大きな衝撃を受けた一人である。漱石のもっとも有名な作品『こころ』では、主人公「先生」が明治天皇の崩御と乃木の殉死に触発されて自殺したことが、次のように書かれてある。

「夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。其時私は明治の精神が天皇に始まって天皇に終わったやうな気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、其後に生き残つてゐるのは必竟時勢遅れだといふ感じが烈しく私の胸を打ちました。(中略)もし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死する積だ。(中略)」私は新聞で乃木大将の死ぬ前に書き残して行つたものを読みました。西南戦争の時敵に旗を奪られて以来、申し訳のために死なう死なうと思つて、つい今日迄生きてゐたといふ意味の句を見た時、私は思はず指を折つて、乃木さんが死ぬ覚悟をしながら生きながらへて来た年月を勘定して見ました。西南戦争は明治十年ですから、明治四十五年迄には三十五年の距離があります。乃木さんは此三十五年の間死なう死なうと思つて、死ぬ機会を待つてゐたらしいのです。私はさういふ人に取つて、生きてゐた三十五年が苦しいか、また刀を腹へ突き立てた一刹那が苦しいか、何方が苦しいだらうと考へました。それから二三日して、私はとうとう自殺する決心をしたのです。」（「先生の遺書」）⁹

以上あげたところから分かるように、『こころ』の主人公である先生は、「明治の精

⁸ 鷗外は大正元年九月、『興津弥五右衛門の遺書』を「中央公論」に掲げて以後、小説の素材をほとんど史実に求めるようになり、大正五年までに数多くの歴史小説を発表し続けた。したがって大正元年より大正五年までの五年間は、鷗外の歴史小説執筆の時期であり、鷗外の文学活動の第四期にあたると思われる。

⁹ 『こころ』は「上 先生と私」、「中 両親と私」、「下 先生と遺書」の三編から成る。本論での引用は「下 先生と遺書」（『こころ』・『漱石全集第九巻』所収）による。

神が天皇に始まって天皇に終わった」と思い、明治天皇の逝去をきっかけに「明治の精神に殉死する」ことを考えはじめた。そして新聞で乃木が死ぬ前に書き残した遺書を読み、ついに死の覚悟を固めて自殺する決心をした。ここで新たな問題が生じてくる。漱石の言う「明治の精神」とはいったいいかなるものであろうか。そして「明治の精神に殉死する」という言葉はまた何を意味しているのか。さらに主人公の先生は何故死ななければならないのか。¹⁰この文章を読んでいくうちに、これらの疑問が生起するのも当然のことである。

乃木希典と同じく、夏目漱石も明治天皇崇拜の気持を深く持っていた人物であった。漱石は明治になる一年前に生まれて、明治時代に育ち、そして明治時代の精神によって培われた。そのこともあって、漱石はしばしば自分の一生を明治という時代に結びつけて考え、明治の歴史はすなわち自分の歴史であると述べている。こういう時代背景と思想のもとで、漱石は「明治の精神が天皇に始まって天皇に終わった」と言い、明治天皇に象徴される「明治の精神」も天皇の逝去とともに、その姿が消えてしまった。そして新しい時代がきた時、この「明治の精神」がもはや時代遅れの精神となってしまうので、明治の影響をもっとも強く受けた自分は「其後に生き残つてゐるのは必竟時勢遅れだ」と嘆いている。漱石はまた明治天皇を「明治の精神」に置き直し、さらにそれを殉死の対象と見なそうとして、「明治の精神に殉死する積だ」と主人公の先生に自分の気持ちを代弁させている。『こころ』の主人公の先生が自殺したのも、天皇死去に続く乃木の殉死を知り、その衝撃を受けた結果として、「明治の精神」に

¹⁰「明治の精神」については、さまざまな解釈がある。たとえば国文学者伊豆利彦は明治の精神を「明治の末年においては、すでにひとつの時代は終っていた。そのすでに終った時代の精神を先生は「明治の精神」とよんだ。それは若々しい明治の精神であり、維新以来、明治の日本をつき動かして来た精神」と解釈している。一方、宗教学者源了圓は明治の精神を「明治天皇と乃木との関係にもっとも象徴的に示されたような、天皇と国民との間のつよい精神的紐帯、巨大な組織としての近代国家を精神共同体たらしめる精神」と言っている。以上あげた解釈は学者によって少し違うようであるが、いずれにしても明治の精神は明治という時代、そして明治という時代の象徴としての明治天皇に深くかかわっている。以上、伊豆利彦「夏目漱石と明治の精神」（『漱石と天皇制』所収、有精堂）及び源了圓「日本の近代化と知識人の自殺（『日本における生と死の思想』所収、有斐閣）を参照。

殉死する決心をしたのであった。

(三)

以上、明治時代のもっとも代表的な文学者森鷗外及び夏目漱石の作品から乃木希典の殉死を考察してきた。上述した『興津弥五右衛門の遺書』と『ころ』はその時代背景と内容は異なっているが、別々の見地から殉死へのアプローチを示していると言える。この二作品には、乃木の殉死に対する鷗外と漱石の感慨がこめられているとともに、この二人が乃木の殉死から多大な衝撃を受けたことも写し出されている。またこの二作品からもうかがわれるように、鷗外と漱石はともに乃木の殉死を肯定し、その死を高く評価している¹¹。言うまでもなく、すべての文学者が乃木の死を肯定したわけではなく、事実、当時の社会においては、乃木の殉死に対してさまざまな意見があったのである。乃木の殉死に際して、森鷗外、夏目漱石の評価とまったく違った態度をとったのは、「白樺」派の人々であろう。

乃木の殉死を聞いて、白樺派のもっとも中心的な文学者の一人である志賀直哉は、その日記に次のように書いた。「乃木さんが自殺したといふのを英子からきいた時、「馬鹿な奴だ」といふ気が、丁度下女かなにかゞ無考へに何かした時感ずる心持ちと同じやうな感じ方で感じられた」（「大正元年九月十四日」）、「乃木さんの死は一つのテンプテーションに負けたのである」（「同年・九月十五日」）。¹²これは単に志賀直哉の乃木の死に対する感想というだけではなく、白樺派の人々に共通した感想とも言えよう。

¹¹ 『興津弥五右衛門の遺書』に続き、森鷗外は同じく殉死の問題を取り扱った『阿部一族』を書いた。細川忠利の死にともなう阿部一族殉死の顛末を描くこの作品において、鷗外はむしろ殉死がもたらしたさまざまな弊害を述べたりして、殉死という行為に批判的な態度を示している。しかし乃木の殉死に触発されて書かれた『興津弥五右衛門の遺書』においては、鷗外が殉死を肯定し、賞賛していることは否定できないのである。

¹² 志賀直哉の日記からの引用は『志賀直哉全集第九巻』（岩波書店）による。

志賀直哉は若い頃から近代思想家内村鑑三を師とし、内村からキリスト教的な価値観を教わると同時に、西洋の個人主義、人道主義さらに非戦論の平和主義、非国家主義的な思想へと自分なりの価値観を形成した。個人主義と人道主義を唱えるため、直哉は武者小路実篤、有島武郎などと雑誌「白樺」を創刊し、保守的な思想を持っていた彼の父親と深刻な対立をしていたほか、他人との協調をしようとしなかった。その後、直哉はそれまでの自己中心的な生き方を反省し、ほかの人たちと調和的な行動を取る努力を見せたが、乃木が明治天皇に殉死した時は、ちょうど「白樺」の創刊の初期で、つまり志賀直哉による人道主義提唱の最盛期にあたっていたのである。¹³

白樺派の人道主義によれば、何よりも個人が各自の個性を尊重することがもっとも重要視されている。このような個人至上主義的な考えは、明治時代の国家至上の観念とは正面から対立するものにほかならない。そして白樺派が唱える平和主義、非国家主義は明治政府がとった国家主義、天皇至上主義とも大いに齟齬をきたしている。このように、あまりにも個人主義と人道主義を強調しすぎたため、明治天皇に殉死した乃木の行動に対して、志賀直哉は「馬鹿な奴」という表現を使っており、そのような行動を、時代の流れに取り残され「一つのテンプレーションに負けた」と位置付けた。したがって彼が乃木殉死を認めようとしめないのもあたりまえのことである。

乃木希典の殉死をさして、白樺派の思想と文学活動を終始リードした武者小路実篤は大正元年「白樺」十二月号に「人類的・附乃木大将の殉死」という文章を発表した。この文章において、彼は乃木の殉死に次のように批評を加えた。

「自分は乃木大将の死を憐れんだのである。憐れまれるのは乃木大将の本意である、もし彼にして名誉心以上の動機で死んだのならば。かくてこそ彼の死は美しいのである。しかし残念なことには人類的な所がない。（中略）吾人の理性に

¹³ 志賀直哉は明治十六年に生まれ、明治四十三年に武者小路実篤などと「白樺」を創刊して、個人主義と人道主義を唱えるとともに、旺盛な創作を始めた。乃木が殉死したのは大正元年、すなわち「白樺」が創刊された翌々年であって、直哉が人道主義を唱えていた最盛期にあたる。

よって認めることの出来ない動機でした行為は同情することは出来ても讚美することは出来ない。理性に戻る行動をとる人は人類的の處のない人である。乃木大将の殉死は、ある不健全なる時が自然を悪用してつくり上げた思想にはくまされた人の不健全な理性のみが、讚美することを許せる行動である。西洋思想によつて人間本来の生命を目ざまされた人の理性はそれを讚美することを許さない。かくてこそ理性に権威があるのである。」（「人類的・附乃木大将の殉死」）

これが武者小路実篤の乃木の殉死に対する所感である。以上あげたところから分るように、武者小路は一応乃木の殉死を美しいと認めているが、殉死は人類的なところがなく、理性に悖る行動であると批判を加えた。¹⁴ここで人類的という言葉は西欧的近代的な意味で、理性は「西洋思想によつて人間本来の生命を目ざまされた人の理性」である。¹⁵武者小路の考えによれば、殉死は単に封建社会が人間性をねじ曲げて形成した思想、道徳で、より具体的に言えば、儒教の影響下に形成された武士道に育まれた人の不健全な理性によるものであるということになる。この不健全な理性に基づく殉死は西欧的近代的な考え方に合わず、しかも人間本来の生命を目ざまされた人の理性に背反するため、われわれ人間は同情することはできるが、讚美することはできないものである。そのために、武者小路は乃木の殉死を「憐れんだ」のであった。

武者小路は青年時代よりロシアの思想家トルストイに傾倒し、平等、博愛の社会主義を唱えるトルストイ主義に心酔した。志賀直哉などと「白樺」を創刊してから、内村鑑三の影響によって、さらにストリンドベリイ、メーテルランク、ゴッホやロダンなどの芸術家の刺激のもとに、自我の解放、尊重、のちに「自分を生かす」という生き方を信奉するようになり、さらにその実現として「新しき村」を創設した。武者小

¹⁴ 「戻る」はもとより「もとへかえる」、「もとのありさまへかえる」という意味であるが、ここでは「そむく」、「さからう」という「悖る」の意味で使われている。武者小路がこの字を慣用することは、日本近代文学大系『武者小路実篤』（角川書店）角川源義に指摘がある。

¹⁵ 「人類的」、「理性」についての解釈は前掲書、四四八頁注四、注十六による。

路のこの人道主義、理想主義は当時多くの崇拜者を生み、教育界にも影響を与えた。彼の人道主義、理想主義の立場からすれば、国家と個人とは直接に何のつながりもないもので、明治天皇の死去はほんの些細なことにすぎず、乃木の殉死はいかなる価値もないことであった。したがって乃木の殉死という行為が、武者小路に共感を生起させないものであったことは言うまでもない。

白樺派の作家たちとは別に、大正時代のもう一人の代表的な作家芥川龍之介は大正十一（一九二二）年に『将軍』という短編小説を発表した。「白禰台」、「間牒」、「陣中の芝居」、「父と子と」の四つの部分から構成されたこの作品は、前の三部分は戦場におけるN将軍の姿とその性格を描き、最後の「父と子と」は、N将軍について従軍した中村少将が大学生の息子と会話を交わす、という内容である。『将軍』は芥川龍之介が明治天皇に殉死した乃木の生き方及びその性格を念頭において書いたものとも言える。この作品の中には、乃木の名前ははっきり出ていないが、芥川は乃木を作品中でN将軍とし、乃木に対する批判と反感の気持ちを明白に表している。¹⁶ここで『将軍』における「父と子と」の中から、その息子の発話を引きながら見てみよう。

「今日追悼会のあった、河合と云ふ男などは、やはり自殺しているのです。が、自殺する前に一写真をとる余裕はなかったやうです」と息子が父に言った。写真を取ってもいいのではないか、最後の記念という意味もあるから、という父の言葉に、息子は「それは少くともN将軍は、考ふべき事ではないと思ふのです。僕は将軍の自殺した気持ちは、幾分かわかるやうな気がします。しかし写真をとったのはわかりません。まさか死後その写真が、何処の店頭にも飾られる事を、——」と述べる。

¹⁶『将軍』は日露戦争を舞台にN将軍（すなわち乃木希典）の態度を諷刺し、偶像破壊の意味を込めた小説である。この作品の第一章から第三章にかけて、芥川龍之介は戦場におけるN将軍の偏執的性格を兵隊たちと比べながら描いている。そして第四章では、芥川はN将軍の下で働いたことのある父と息子との対話を通して、父と子の間のN将軍に対する評価のずれを持ち出しながら、乃木への批判を試みている。

これを聞いた父は、N将軍は徹頭徹尾至誠の人だったと怒鳴った。すると息子はさらに「無論俗人ぢやなかつたでせう。至誠の人だつた事も想像出来ます。唯その至誠が僕等には、どうもはつきりのみこめないのです。僕等より後の人間には、猶更通じるとは思はれません。……」と反論して、結局この親子の対話は、父親の「時代の違ひだ」という嘆息の中で終了して、作品自体も終わりを迎えるのである。

周知のとおり、芥川龍之介は三十六歳の時、「ぼんやりした不安」の一句を遺書に残してこの世を去った。芥川は自殺という方法を選んで自分の命を絶ったが、明治天皇に殉死した乃木の行為を必ずしも認めているとは言えない。乃木の殉死に芥川がもっとも納得できなかったのは、乃木が殉死する前に意識して写真を撮ったということであろう。事実、写真を撮ることが好きであった乃木は、殉死する日の朝、近所の写真師を家まで呼び、夫婦そろって写真を撮ることにした。しかし芥川龍之介は乃木が殉死する前にした写真撮影に非常にこだわり、そこに何か乃木の行為の中に潜む意識性を感じとったために、写真を撮らせた乃木を自殺した友人と比べたのであろう。これは芥川が乃木殉死に対してもっとも反感を表明したところである。

世間の物事への観察が鋭く、考え方がきわめて繊細な芥川龍之介は、乃木が殉死した気持ちがまったく分らないわけではない。ただ殉死する前にわざわざ写真を撮ったという乃木の挙動は理解できなかった。それはもしかして自分が殉死してから、その写真がどこかで飾られることで世間への宣伝にしようとした目的があるのではないかと芥川は疑問を持っていた。したがって芥川は乃木の殉死の裏に潜むエゴイステイックな不備を指摘し、その殉死がはたして至誠から出たものなのかと疑っている。¹⁷そ

¹⁷『将軍』を発表する五年前に、芥川は『手巾』という小説を発表した。この作品において、芥川は近代思想家新渡部稲造をモデルにし、新渡部が唱えた日本の武士道をととても高く評価している。しかし乃木希典をテーマにした『将軍』では、芥川の乃木殉死のあり方に対する暗黙の批判、反発が示されていることを否定しがたいのである。

のため芥川は乃木の死を「殉死」と言わずに「自殺」という表現を使っていた。そこには基本的に白樺派の人々の考えと共通したものがあつたと言えよう。

(四)

現代日本文学作品の中で、乃木希典の殉死に関する論述は、司馬遼太郎の『殉死』及び加藤周一の「乃木希典一天皇の武士」がもっとも代表的なものと言える。では現代社会において、日本の文学者たちは乃木の殉死をどのように見ているのか。以下、まず司馬遼太郎の『殉死』、そして加藤周一の「乃木希典一天皇の武士」の二作をめぐりながら明らかにしたいと思う。

『殉死』は第一部の「要塞」と第二部の「腹を切ること」から構成されている。「要塞」において、司馬遼太郎は乃木の出生、成長の過程からはじめ、西南戦争での軍旗喪失事件、日露戦争中における旅順攻撃での悲劇を取り上げながら、これらの事件が乃木の一生にどんな影響を与えたかを解明した。そして第二部の「腹を切ること」では、司馬は静子夫人のことにも触れながら、乃木が殉死するまでの過程を記述している。司馬はさらに乃木が山鹿素行の思想に熱中したことを指摘し、殉死する前に乃木が昭和天皇に『中朝事実』を進呈して演述したことを取り上げながら、彼の殉死の動機を解明しようとしている。

司馬遼太郎の解釈によれば、日露戦争の後、日本国民の間では国家意識がすでに失われつつあり、乃木は日本の行く末に危機感を感じていた。乃木は当時現れはじめていた新しい文明と思潮の中で、国家の立場を意識する人が少なくなり、日本はいつか崩壊し去るのではないかと心配していた。では何故このような現象が現れたのかについて、乃木は日本の国民は立派であるが、忠君思想という底が抜けてしまったからだと考えている。この忠君思想が抜けてしまったことにより、日本には上述した危機が

現れてきたというのである。¹⁸

事実、乃木希典のこの忠君思想は山鹿素行が『中朝事実』の中で強調した思想、吉田松陰が主張した尊皇精神とはきわめて近いものである。山鹿素行はこの思想を唱えて、江戸幕府の政策に抵触した結果、赤穂藩へ放逐され、暗澹とした後半生を送ったのであった。吉田松陰もこの思想を強調したために、結局獄中で刑死していた。ところが、乃木は逆にこの思想が最盛期の時に育てられ、この思想のおかげで明治天皇の信任と寵愛を獲得した。したがって、この忠君思想が国民の中から退潮しようというきざしが見えた時、乃木の心の中は無力感で一杯になった。特にその時、乃木はすでにその晩年を迎え、老残の身であった。自分のこの憂国意識をいったい誰に語り残すべきであろうか、と思い悩んでいた。司馬遼太郎はその時の乃木の心境を次のように述べている。

「かれ（乃木）はすでに軍部から慇懃なかたちで疎外されていた。学習院でもかならずしも生徒のあいだから魅力ある教育者としては映っておらず、著述して世に問うにも、かれは世を納得させるだけの論理の力をもっていなかった。かれに残された警世の手段は、死であった。かれは自分のおよそ中世的な殉死という死がどのような警世的効果をもつかを、陽明学の伝統的発想を身につけているだけにこのことのみは十分に算測することができた。」（『殉死』・「腹を切ること」）¹⁹

以上のように、乃木は陸軍大将として軍部から疎外され、学習院の院長としても学生から敬愛されていなかった。自分の憂国意識を理解してくれる人が一人もおらず、しかも人生の晩年を迎えてすでに老残の身であった乃木は、ついに明治天皇の死去を

¹⁸ 以上、司馬遼太郎『殉死』（『司馬遼太郎全集第二十三巻』所収、文芸春秋社）四九五頁から五〇三頁までを参照。

¹⁹ 前掲書、五〇四頁。

きっかけに、殉死という最後の切り札をもって自分の考え方を世間に表明すると同時に、世間の人々に天皇と国家への重視を喚起しようとしたのである。そこで、乃木は将来日本の天皇になるはずの昭和天皇にだけ『中朝事実』を演述して、その二日の後に殉死の道を選び、このような死に方によって上述の目的を果たそうとしたのである。

以上あげたのは司馬遼太郎の乃木希典の殉死に対する見解である。一方、同じ現代文学者加藤周一の見方はどうであろうか。加藤周一とM・ライシュ、R・J・リフントとの共著になる『日本人の死生観』においては、十九世紀から今日に至るまでの近現代日本を代表する人物を六人取り上げ、その六人の死生観に探索が加えられている。その中で乃木希典は日本の近代的転換期を生きた人物として選ばれ、「乃木希典一天皇の武士」という題で、乃木の殉死に対して新たな光があてられた。²⁰

「乃木希典一天皇の武士」において、加藤周一は乃木希典の出生から紹介しはじめ、明治維新、西南戦争、日露戦争及びドイツ留学など、彼が一生に経験した重要な出来事から、乃木の思想並びに死生観の形成を叙述した。加藤はさらに乃木が残した遺書を分析しながら、乃木殉死の動機を解明しようとしている。そして遺書第一条の冒頭に「自分此度御跡ヲ追ヒ奉リ自殺候段恐入候儀其罪ハ不軽存候」とあるように、乃木が自分の死を「殉死」または「切腹」とせず、「自殺」と述べている点に注目し、乃木があえて「殉死」、「切腹」という言葉を避けて「自殺」を使ったという観点から、乃木の真の死因を完全に彼自身の個人的な要因によるものだと結論を出した。

加藤周一によれば、乃木が自殺した真の理由は、明治十（一八七七）年西南戦争での軍旗喪失による自責ではなく、それ以前に起きた萩の乱の際、乃木にはすでに死の覚悟があったという。何故ならば、前節でも少し触れたが、明治八（一八七五）年の

²⁰ 加藤周一とM・ライシュ、R・J・リフントとの共著『日本人の死生観』においては、乃木希典、森鷗外、中江兆民、川上肇、正宗白鳥と三島由紀夫が、近現代日本を代表する人物として選ばれている。その中で、乃木と鷗外と兆民の三人が明治維新という最初の近代的転換期を生きた人物として、河上、白鳥、三島の三人が敗戦と戦後という第二の近代的転換期を生きた人物として代表されている。この本で著者たちは、心理学的、社会学的な考察を加えながら、その六人の死生観を探究している。

萩の乱で、乃木は明治政府の政府軍に参加した。しかしその戦う相手である前原一誠の軍の中に、乃木の恩師玉木文之進と彼の弟正誼がいた。この反乱軍討伐の際、乃木はその陣頭には立たなかったが、萩の交戦で乃木正誼が戦死した。そして文之進ももはや望みがないと覚悟してその後切腹した。このような恩師とその弟の死は、乃木に葛藤を生じさせ苦しめることになる。自分の中で、国家、天皇への忠誠と、恩師及びその弟への愛着の念との間に衝突が起きたため、この時より乃木はこの二人の死に対する罪悪感に悩んでいて、死の念を持つようになったのである。²¹

そして明治三十七（一九〇四）年に日露戦争が起こった。旅順攻防戦の二百四十日の間に、戦略が下手な乃木は五万八千人の死傷者を出した上、二人の息子勝典、保典を失った。この会戦は最終的に日本軍が勝利をおさめたが、その勝利は乃木の手柄ではなかった。自分の無謀と失策で、数多くの兵士を死なせたことから、乃木は人生に望みを絶ち、すでに自分を死んだ者と感じていた。乃木は「幾多の現実の、そして象徴的な死を経験しながら生き残った」²²と、加藤周一はその時の乃木の心境を叙述している。

さらに悪いことに、明治天皇の信任を得て学習院の院長に就任した乃木は、その在任中に武士道の思想を学生に押し付け、自ら身を持って日常生活上と言行举止の中に励行していた。ところが、彼の苦心と努力は学生に見捨てられ、その結果は哀れにも実らなかった。それどころか、乃木のこのような施策は逆に学生からの反感を招き、彼は学生から時代の潮流に取り残された旧思想の人間と決め付けられた。このように、自分が軍人としては無能であること、教育者としては失格であることを悟った時、乃木はついに死の意志を固めて、自ら命を絶とうとするのである。

乃木は自分の死に方によって、自分が犯した数々の過失が償われ、自分が過した恥辱の歳月が赦されることを望んでいた。それと同時に、彼は自分の理想化した真の武

²¹ 加藤周一「乃木希典一天皇の武士」（『日本人の死生観上』所収、岩波書店）五〇頁から五三頁までを参照。

²² 前掲書、七〇頁。

士としての自分のイメージを通じて、社会にアピールしようとした。したがって、乃木の死には二つの目的がある、と加藤周一は指摘している。つまり軍人としてさまざまな過失をおかしたことに対する自己断罪と、真の武士としての剛勇の証明である。そして乃木が切腹した瞬間、「乃木は自分の罪をあがない、かつ武士としての性格を实体化しようとした」と²³と、加藤は結論づけた。

(五)

以上、明治時代のもっとも代表的な文学者森鷗外、夏目漱石、そして大正年間の著名な文学者志賀直哉、武者小路実篤、芥川龍之介、さらに現代の日本文学者司馬遼太郎、加藤周一などの著作及び論述から、乃木希典の殉死をめぐってそれぞれの見解と観点を要約してきた。これまで述べたことから分かるように、乃木の殉死が意味していることは、時代の変遷と価値観の変化とともに、変っていくものである。森鷗外の『興津弥五右衛門の遺書』及び夏目漱石の『こころ』に見られる殉死への肯定と擁護から、次の世代の武者小路実篤の「人類的・附乃木大将の殉死」、芥川龍之介の『將軍』に見られる殉死への反発と批判に至り、さらに現代文学者司馬遼太郎の『殉死』、加藤周一の「乃木希典一天皇の武士」になると、現実主義、合理主義そして人道主義の観点から、乃木の死について論じられるようになっていく。このように、日本人の殉死に対する見方は、時の流れにともなって変化していくと同時に、日本人の死生観そのものも次第に変わりつつある。

実は近世の初期において、殉死は非常に盛んであった。殉死は当時はやっていた男色関係ともかかわっていて、主君の寵愛が深かった者が行う場合が多かったが、その行為自体も一種の主君への忠誠と見なされ、武士としての最高の道徳と考えられていた。しかし殉死の流行により、多くの人材が失われて大きな弊害が現れたことから、

²³ 前掲書、八〇頁。

幕府はついに殉死の行為を厳しく禁じはじめ、殉死を処罰することにした。それにもかかわらず、武士の身分が存在していた江戸時代には、武士としては殉死を依然として主君への献身的な道德、最高の名譽と見ていた。

そして時が近世から近代に突入して、江戸時代から明治時代となつてから、身分制度が廃止されたことによって、武士という身分がなくなり、殉死という行為も見られなくなった。ところが、乃木希典は終始武士として生き続け、明治天皇を主君として見ていた。そして乃木が明治天皇のあとを追って殉死をした行為は、武士道による殉死を実践した行為にほかならない。前節で取りあげた森鷗外の歴史小説『興津弥五右衛門の遺書』から分るように、乃木の殉死から衝撃を受けた鷗外はその殉死を当世には起こりえない出来事として受け止めており、その死への共感を強く訴えている。そして夏目漱石の『こころ』からもうかがえるように、漱石は乃木の殉死に大いに感動し、そのために主人公の先生を明治の精神に殉死するために自殺させることにしたのである。

実際、乃木の殉死に対する肯定、賞賛は以上あげた森鷗外、夏目漱石の作品のみに見られるだけでなく、一般的に言えば、大正時代には特に乃木が殉死した直後、乃木の崇拜者が非常に多く、乃木の殉死にはかなりの讚美、敬仰の声が強かった。それはさらに乃木の神格化の方向へ動きはじめ、乃木の切腹場所に乃木神社を建立し、乃木希典を軍神として崇めるようになった。そればかりでなく、乃木の天皇、国家への忠誠を世の中に知らせるために、「軍神乃木」という表現は大正時代の中頃から日本国内の小学校の教科書をはじめ、伝記、歌の類とあいまって紹介されはじめた。当時小学生教科書「国語」、「修身」の中に、乃木が幼年時代からいかにして武士の魂を身に付けようとし、自分を武人の手本としていかに努力してきたかが記載されている。そのほかに、日露戦争後の乃木が学習院院長になった時のエピソードも取り上げられ、乃木の「忠誠」、「清廉」、「質素」の側面を評価している。これらは戦後、連合軍の指摘により、はじめて教科書から削除されたものである。しかしこの事実からも当時の

人々が乃木の殉死に対してどれほど評価していたのか見当がつくであろう。²⁴

言うまでもなく、すべての人が乃木の殉死を認めたわけではない。逆にその殉死に批判を加えた人もいた。特に自分の考えを持ち、伝統的な価値を否定しようとした若い世代は、明治天皇に対する乃木の殉死を認めようとしなかった。前節でも述べたが、個人主義、人道主義を標榜する白樺派の作家志賀直哉は、乃木の殉死を時代の流れに取り残され「一つのテンプレーションに負けた」ものと考えていた。また理想主義を強調した武者小路実篤は、乃木の殉死が時代遅れの近代的な人間の理性に悖ると批判した。実際、白樺派の人々は学習院にあって、晩年の乃木と直接に接触していた。当時、乃木は白樺派に代表されるような若い世代が西洋の思想にかぶれて天皇と国家への忠誠を失うことを恐れ、武士道の精神を生徒たちに徹底させようとした。これに対して白樺派の人々は、乃木のこの武士道教育を時代錯誤的なスパルタ教育と考え、乃木を公然と批評したり反抗したりすることもあった。そのために、乃木はしばしば森鷗外のところへ行って助言を求めている。

このように、たとえ乃木の学生であった志賀直哉、武者小路実篤であっても、乃木の進めていた武士道教育と思想を受容することはできなかった。また乃木が武士道の伝統を守り明治天皇に殉死した行為に対しても、彼らは賛同できなかった。ここに価値観の変化が現れ、古い世代と新しい世代の価値観の相違が明らかに見られる。乃木の殉死に対する見方も世代の違いからその差が現れている。つまり古い世代が彼の死に肯定的、賞賛的な態度を取っていたのに対して、若い世代はそれを批判し反発する立場にある、というように、世代の差と時代の変遷とともに変わっていくのである。

東大文学部出身の芥川龍之介は乃木希典の教え子ではなかったが、芥川は終生夏目漱石を師とし、漱石の推薦によって日本の文壇に登場した。その代表的な王朝物と呼ばれる諸作品はほとんど中世の説話集に典拠を持っているので、森鷗外の歴史小説ともつながりがあり、鷗外から実質的な影響を受けている。芥川は文学的に漱石と鷗外

²⁴ 乃木が軍神として祭られ、日本の教科書に載せることは、『乃木希典全集上・下』及び大濱徹也『乃木希典』（河出書房）を参照。

から大きな影響を受けているにもかかわらず、その精神に強い影響を及ぼしたのは、森鷗外や夏目漱石よりもむしろ志賀直哉、武者小路実篤のほうが強かったと言えよう。乃木が殉死した時、芥川龍之介はわずか十八歳であった。そして『将軍』を書いた時の芥川は三十歳を過ぎたばかりであった。自然主義を崇拜した若い芥川にとっては、何よりも芸術至上主義を重んじていたため、直哉、武者小路と同じように、明治天皇に殉死した乃木の気持には理解しえないものがあつた。特に殉死する前に乃木が意図的に写真を撮らせた行動から、芥川は乃木の殉死動機に疑問を持ちはじめた。この芥川の懐疑的な考えは、当時若い世代のインテリが乃木の殉死について、合理的、懐疑的な態度をもって考えはじめたことを反映している。そしてこのような合理的、懐疑的な態度は、自分の先生の考え方からも影響されず、当時政府が作り出した乃木希典のイメージとも正面から対立していると言えよう。

現代日本文学者になると、もっと理性的かつ冷静な態度をもって殉死を論じ解釈する。たとえば歴史小説家として著名な司馬遼太郎を例にしてみると、彼は乃木の殉死した当時の時代背景などを考慮に入れ、その時の国民が有していた国家意識を分析しながら、乃木の憂国意識を同時に取り上げて彼の殉死を論じようとした。司馬遼太郎によれば、乃木の殉死は武士が主君に忠誠を表そうとして行ったことではなく、その殉死の背後には、さまざまの複雑な個人的要因も含まれていた。たとえば乃木は軍人としても教育者としても成功したとは言いがたい。彼は自分の老後または国家の将来にも自信を持っていなかった。このような状況のもとで、彼は「死」を選択し、自分の意志を表明すると同時に、明治天皇への殉死を遂げることによって、世間の人々に天皇と国家との重視を喚起しようとしたのである。

そして加藤周一の場合になると、乃木の殉死に対して新たな見解が示される。かつて医者をしていた加藤は、心理学及び精神史的な立場から乃木希典の死生観の形成を分析しながら、乃木の殉死した理由を指摘したが、その結論は司馬遼太郎の見方と大差はない。加藤はまた人道主義、平和主義の立場で、われわれ自らの生の自由、独立及び平和の観点のもとでこの事件を考察した。すなわち乃木は生前、数多くの部下

とロシア人の命を失わせた。そして死後なお、日本軍国の象徴的な道具とされ、さらに多数の日本人と中国人の生命を奪う一因となった。乃木の殉死がいかに無駄かということは自明であったし、その殉死の日本社会へのただ一つの貢献と言えるのは、彼の殉死が森鷗外に江戸時代を研究するという示唆と動機を与えたことである。森鷗外は乃木の死を通じて得た感動を発揮しながら、近代日本においてもっとも完璧な歴史小説を創造したのである。これも乃木の殉死が意図しなかった一つの結果である、と加藤は強調している。²⁵

以上のように、乃木殉死に対する日本社会の見方は、初期の肯定、評価から懐疑、批判に変わり、そして人道主義、合理主義、平和主義による解説の試みへと展開してきている。いずれにしても、その評価が時代背景と価値観の変化により、変わるものであることはたしかである。またその死の意義をめぐって、森鷗外、夏目漱石、芥川龍之介、司馬遼太郎、加藤周一などを代表とする数多くの文学者は、変りつつある価値観と時代背景のもとでその解明に努めたが、依然として賛否両論のままである。しかしながら、彼らの努力の結晶として、以上あげた多数の名作が創出されている。そしてこれらの文学作品を通じて、今日に至るまで乃木の殉死は人々の記憶から消えたことはなく、忘れがたい印象を与えるものとなっている。それと同時に、乃木の殉死に共感した人々は、今日の日本人の中にもたくさんいると思われる。

(六)

最後に一言を付け加えたいと思う。一九九五年にオウム真理教による地下鉄サリン事件が起きたあと、乃木希典を祭る乃木神社には参拝者が急に増えてきて、乃木希典の崇拜者が急増することになったそうである。何故このような現象が起きたのか、その背景を少し述べてみたい。変化の激しい現代社会においては、人々の価値観もその

²⁵ 加藤周一・前掲書、七八頁を参照。

変化にともなう多様になってきている。そこで、人々は自分の存在価値、つまり自分の生きがいについて疑問を持ちはじめた。言い換えれば、自分が何のために生きているのか、何のためにこの世に生まれたのか、といったようなことが分からなくなった人が増えてきたということである。科学が発達して技術が進んでいる今日の社会では、脳死とか死の尊厳を重視するなど生命倫理の尊重を唱える一方で、何のために生きているのかという根源的な問題はあまり提起されていない。そのために、人々はこのようにはっきりした目標もなく、ただぼんやりとして生きていることに不安を感じはじめたのである。

ところが、地下鉄サリン事件が人々に一つのヒントを与えた。通常の通勤電車の中で、何の罪もない人間が一瞬のうちに命を奪われてしまった、という事実である。このことをきっかけに、人々は人生の無常さを痛感し、生と死の間がこんなに距離の近いものだったとは思わなかったこと、人生というものはまさにはかり知れない存在であるということが分るようになった。このような背景のもとで、多くの日本人は明治天皇に殉死した乃木希典のはっきりした生き方を懐かしく思い出し、彼の生き方をあらためて評価しはじめた。前節でも論述したが、乃木の殉死の是非に対して、日本の文学者たちでもその見方には賛否両論があった。しかし乃木が明治天皇のあとを追って武士道の伝統的な死に方である切腹によって殉死を実行したのは事実であり、またこの事実は多くの日本人の乃木の死に対する一般的な受け止め方でもあった。明治天皇を自分の生きがいとした乃木は、天皇への忠誠を尽すために、その一生を天皇に捧げ、天皇のために生き、そして天皇のために死んだ。このような死生観を持っていた乃木と、自分が何のために生きているのか分らない現代人とは、あまりにも対照的と言わなければならないであろう。

以上の理由で、地下鉄サリン事件の後、乃木の生き方を新たな見方をもって理解しようとする日本人が増えてきたものと考えられる。つまり乃木のように明確な人生観を持ち、一生を通じてそれを成し遂げるといふ死生観を通じて、自分の生きがいを見出そうとする人たちが増えてきたのである。そのために、乃木神社の参拝者が増え、

乃木の崇拜者が増えてきたのである。そして今日の日本社会では、乃木希典は単に軍神として祭られるのではなく、日本人の英雄、さらに現代日本人の死生観形成の拠りどころの一つとして祭られるようになった。それまで閑静だった乃木神社も、昔の結婚式場からイメージが一変して東京都内の名所に変り、参拝者たちで賑わうようになった。言うまでもなく、このような変化は、乃木が殉死した時に意図したものではなく、想像すらしなかったことである。しかしこのことから、日本人の死に対する肯定、そして日本文化の中に潜んでいる死への賞賛というものが存在しているという事実があるのではないかと推察することができるように思われる。

引用文は以下にあげる本文によるが、適宜表記を改めたところがある。

『興津弥五右衛門の遺書』からの引用は『鷗外全集第十卷』（岩波書店）による。

『こころ』からの引用は『漱石全集第九卷』（岩波書店）による。

「人類的・附乃木大将の殉死」からの引用は日本近代文学大系『武者小路実篤』（角川書店）による。

『将軍』からの引用は現代文学大系『芥川龍之介集』（筑摩書房）による。

『殉死』からの引用は『司馬遼太郎全集第二十三卷』（文藝春秋社）による。

「乃木希典一天皇の武士」からの引用は『日本人の死生観上』（岩波書店）による。

参考文献

- | | | | |
|----------|-----------|---------------|-----------|
| 浅野洋・芹澤光興 | (一九八八年五月) | 『漱石・鷗外 対象の試み』 | 日本：双文出版社 |
| 稲垣達郎 | (一九八九年四月) | 『森鷗外の歴史小説』 | 日本：岩波書店 |
| 伊豆利彦 | (一九八九年九月) | 『漱石と天皇制』 | 日本：有精堂 |
| 大濱徹也 | (一九八八年一月) | 『乃木希典』 | 日本：河出書房新社 |

- 小田村寅二郎 (一九六八年二月) 『日本思想の系譜』 日本：国民文化研究会
- 加藤周一 (一九七七年五月) 「乃木希典一天皇の武士」(『日本人の死生観上』所収) 日本：岩波書店
- 清田文武 (一九七九年四月) 「鷗外の歴史小説における人間像の形成」(『森鷗外』所収) 日本：有精堂
- 玖村敏雄・村上敏治 (一九七九年六月) 『山鹿素行・吉田松陰集』 日本：玉川大学出版部
- 桑原嶽・菅原一彪 (一九九二年一月) 『乃木希典の世界』 日本：新人物往来社
- 司馬遼太郎 (一九七二年七月) 『殉死』 日本：文藝春秋社
- スタンレー・ウォシュバン著・目黒真澄訳 (一九八〇年一月) 『乃木大将と日本人』 日本：講談社
- 玉井敬之・藤井淑慎 (一九九一年四月) 『こころ』 日本：桜楓社
- 田原嗣郎 (一九八三年十月) 『山鹿素行』 日本：中央公論社
- 手塚豊・中山光勝 (一九九四年十一月) 『乃木希典全集上・中・下』 日本：国書刊行会
- 戸川幸夫 (一九六八年二月) 『乃木希典』 日本：人物往来社
- 藤本千鶴子 (一九七九年四月) 「阿部一族事件の発掘」(『森鷗外』所収) 日本：有精堂
- 松本三之介 (一九八四年一月) 『吉田松陰』 日本：中央公論社
- 源了圓 (一九七三年一月) 『徳川思想小史』 日本：中央公論社
- 源了圓 (一九七七年二月) 「日本の近代化と知識人の自殺」(『日本における生と死の思想』所収) 日本：有斐閣